

21世紀に生きるイブセン—『能・ノーラ』創作台本付—

Ibsen Living in the 21st Century
—Noh Adaptation of *A Doll's House, or Nora*—上田 邦義
UEDA Kuniyoshi

Abstract: Commemorating the 100th anniversary of Japan Norway Friendship Treaty in 2005, Henrik Ibsen's *A Doll's House* was adapted into a Noh play by the present writer and premiered in Tokyo, directed by him and Mitsuya MORI, an Ibsen scholar of Japan. Then the company with Reijiro TSUMURA (Kanze school) as *shite* toured Skien, Ibsen's birthplace, and Bergen in Norway, as well as Stockholm and London. Its popular response and favorable criticisms as seen in the newspaper reviews of Europe (cf. URL: <http://atlantic.gssc.nihon-u.ac.jp/~ueda>), requesting its repetition for the 100th anniversary of Ibsen's death in 2006, may be attributed to the unexpected adaptation, in the combination of Western and Japanese Noh styles, without any drastic change of the sequence or speeches of the original play. The present writer, as the conclusion of his study of Ibsen's later works, wrote his first script of *Noh: Nora, or Double Nora*, intending it to be an ideal Noh play to give the audience a key to resolve Ibsen's lifelong and most difficult problem of man and wife, which, however, missed the chance of staging. It reflects Ibsen's last play, *When We Dead Wake* in its symbolic techniques of presentation and futuristic spirituality, which are the characteristics of Noh plays.

Keywords: Henrik Ibsen, Norway, *A Doll's House*, Noh adaptation, *Noh: Nora*, or *Double Nora*, women's or human liberation, futuristic spirituality, *When We Dead Wake* イブセン、ノルウエイ、『人形の家』、『能：ノーラ、またはふたりのノーラ』、女性解放、人間の意識改革、未来志向の精神性、『私たち死んだものが目覚めたら』

はじめに

これは「人と人との本当のつながりは、いかにして可能であるか」を主題とする私論で

ある。それはヘンリック・イブセン (Henrik Ibsen, 1828-1906) が、特に夫婦の場合について、『人形の家』(1879)以降の全現代劇作品を通じて追究したテーマであった。そしてこれは21世紀の(人間の歴史を通じて常にそうであった筈の)一大課題であり、新作能のテーマとするに最もふさわしい、人間の本質から社会のあり方に関する主題である。前半に筆者のイブセンとの関わりの経緯と考察を、後半に結論として拙作能台本を収める。

イブセンとの出会い

2000年10月11日から15日までの5日間、東京は両国の劇場シアターX(かい)で、毛利三彌訳・台本・演出による『ノーラ、または人形の家』が上演された。前年の『人民の敵』に次ぐ「イブセン現代劇連続上演」第2作である。

その最終日、15日、日曜の午後、観劇中に私は、これは能になる、これは素晴らしい能になる、と直感した。ぜひこれを能にしたい。そしてまず東京で初演し、ノルウェイに持ってゆく。それから世界を回る、と。

終演後、数名の方にこの話をしたが、どなたも共鳴はされなかった。

イブセン現代劇の能翻案の可能性

確かに世俗のテーマを扱ったリアリズムの会話劇が、伝統的で様式的な、しかも亡霊の出現するオペラティックな演劇に翻案できるとは考えにくい。しかしシェイクスピア劇同様、不可能ではない筈だ。『ハムレット』も『オセロー』も『クレオパトラ』も謡曲になり、能に翻案されて、多くの観客に鑑賞されている。英語謡曲も不可能と信じられていたが、英語能『ハムレット』や『オセロー』は、すでに多くの外国人に喜ばれ受け入れられている。世阿弥にとって能とは、謡いであり舞いであった。これら二大要素を踏まえさえすれば、能ほど柔軟で創造的な演劇形式はないと私には思えるのだ。

その後、東京のノルウェイ大使館で、ノルウェイ人のイブセン研究者によるイブセン講演会が開かれた。講演後の質疑応答で、もしもイブセンの作品が能に翻案(Adaptation)できたならば、ノルウェイでは受け入れられるであろうかと訊ねてみた。その返答は「歓迎されるでしょう」であった。

私は「能・ノーラ」の構想に取り組んだ。そして一方では、イブセンの『人形の家』以降のいわゆる現代劇すべてに目を通し、また毛利氏の連続上演の『海夫人』(1888)や『ヘッダ・ガブラ』(1890)をシアターXで真剣に観た。私のイブセン能構想は、イブセン理解・解釈とともに出来上がっていった。大事なことは、過去と現在を、未来に向けて生かすこと。さらにそれらをどう生かすか、それが問題なのだ。

研究の方向性こそ重要

単に過去や現在の事実を調査研究するだけでは研究として十分ではない。それをどう生かすか。そのためには方向性（Direction）が最も重要になってくる。良い方向性を伴わない研究は、不完全だけでなく危険を伴うことさえ多い。良い方向性とは何か。すべての人の幸せである。この目標につながるか。特定の人、特定の民族国民ではない。地球上のすべての人の幸福につながるか。

より良い幸せは、心身ともの基本的な満足感・充実感から始まって、生活の質的向上、美化、芸術化につながるであろう。そして次第に高度の精神性を伴うものとなるであろう。

『ノーラ、または人形の家』能翻案の要因となった台詞

観劇時、『ノーラ、または人形の家』が能になりうると私に確信させた要因を、いくつか挙げてみよう。

まず、ノーラの、青い空と海に対する憧れである。¹⁾ これだけでも十分、能になりうる。勿論そのノーラがシテである。（この劇の真の主人公は夫のヘルメルだと直感したが）。『海夫人』鑑賞はこの確信をさらに強めてくれた。後にわかったことだが、イブセン能においては、海への憧れは外せないだろう。俳句に季語があるごとく、能に季節の花のイメージがあるように、イブセン劇には花ではなく、代わりに青い海がある。

さらにノーラの友人のリンデである。彼女の台詞が注目された。「わたし働くことがない生きて行けない。でも自分のために働いたってちっとも楽しくない。今はどうしようもない空っぽな感じなの。クログスタ、わたし働いてあげる相手がほしいの」²⁾ このせりふ、この発想があれば、十分ではないか。だが相手の男はここではこの心理を解さず、「そんなこと、女のヒステリーで言っているだけだ」³⁾ と返答する。

また医者ランクの台詞がある。「ぼくは、次の仮想舞踏会に、見えない人間になる」「大きな黒い帽子——隠れ帽子っての知らないか？ そいつをかぶると姿が見えなくなる」⁴⁾ など。さらにまた「そうだ、なんでここに寄ったかすっかり忘れていた。ヘルメル、シガーを一本くれないか、黒いハバナを」⁵⁾ にも、大いに食指をそそられた。

しかし何と云っても、ノーラの台詞「仮装を脱ぐの」⁶⁾ である。「座ってトルヴァル、お互い話すことが沢山ある」に始まる夫トルヴァル（＝ヘルメル）との一連のやりとりである。「わたしたち八年間夫婦だった。気がつかない？ これがあなたとわたし、夫と妻が真面目に話をする最初よ」「お互い真面目になって、心の底まで話し合おうとしたことが一度もなかった」「あなたは一度だってわたしを理解しなかった」⁷⁾ これは「クセ」にぴったりだ。勿論「居グセ」である。このシーンが一つのクライマックスになる。

もう一つのクライマックスは、この劇の結末である。妻の家出という未解決に投げ出し

れる難題を、どう前向きに処理することができるか。解決へのヒントは与えられるか。それが出来れば、素晴らしいキリになる。感動的な能になる。

女性解放から人間の意識改革へ

この劇は19世紀末、ヨーロッパに広まりつつあった、そしてやがて日本にも広まることになる、女性解放運動を鼓舞するものとしては大いに評判になった。問題は男性の側にあったことは明らかである。しかしこの劇の今日的価値は、人間自身の意識変革を求めるところにある。男性、否人間一般の意識改革の劇として、21世紀の能になる。身近な人（特に家族）に対する人間的で自然な優しい感情を犠牲にしても、仕事や社会的な役割や世間体を尊ぶ人間。家族や他人を自分と同じ人格として尊重し思いやることができない、自己中心的な人間の、意識変革の問題である。経済が最初に意識され、最も尊重される社会はいまだ未熟な社会であり、自己の幸福追求が最も基本的な権利とされる社会もいまだ未熟な社会である。そこには本当に素晴らしい人間関係はないことを気づかせてくれる。

だが家出をするだけでは問題解決にはならない。『人形の家』をこのまま上演するだけでは今日的意味が十分でない。近代劇を鑑賞するという知的満足以上にでない。自己中心の競争社会を出ず、観客は放り出されたままである。解決への光を与えることはできないか。

男性は妻の長話が嫌いなことに気づかぬ妻たち

この劇からも伺えるように、仕事を抱えている男性は、一般に妻の長々しい説明に耳傾けるのが苦手である。しかし多くの女性はそれに気がついていない。女性は、詳しく説明すれば男性はわかってくれると思っている。しかし、長々と説明されればされるほど、多くの男性はいらだってくる。これは男性の問題であるが、女性の側の男性心理への理解も必要なのだ。ひとことだけ言って、黙るか座をはずすのがいいらしい。家出はしないまでも。あとは彼に考えさせればいい。後に解決法はさも彼自身が思いついた如くに。教えるのではない。まして命令してはいけない。夫が年上の場合には特に。例えば夫に読ませたい本があるときには、彼の目に付くかもしれない場所にただ置いておけばいい。お互いに相手の心理を思い、尊重する。男の決断を待っていると思えたときには男性は断固決断する。自己中心ではなく。これが当たり前の夫婦にとっては当たり前のことだ。人生は組み合わせ次第である。組み合わせを変えられないなら、自分が変わる以外にない。

家出をしないドイツ公演

しかし問題の核心は、実は男性社会にあることを、イブセンは指摘したかった。評価の高まったこの劇が1880年、ドイツで公演されるに際して、彼はその国情に合わせて書き換

えを迫られた。そして、家出を諦めるノーラに書き換えた。むりやり子供部屋を覗かされたノーラは結局は家出ができなくなり、家に留まるという結末である。自らそう書き換えた後、それを「作品に対する野蛮な暴力行為」(an act of barbarous violence against the play)⁸⁾と呼んでいる。

イプセンの覚書

イプセンが『人形の家』を書いたのは1879年5月である。その前年、1878年の10月19日の日付けのついた「現代悲劇のための覚書」というノートに次のように書いている。

二種類の精神的な法、二種類の良心がある。一つは男のもの、もう一つはまったく異なる、女のもの。両者は互いを理解しない。しかし女は実際生活において男の法で裁かれる。あたかも女ではなく男であるかのよう。 ⁹⁾

また、女は現代社会において自己を全うすることができない。これは徹頭徹尾、男性社会だからである。法律は男が作り、検事も裁判官も男であって、女の行動を男の立場から裁く。

矢崎源九郎は、イプセンの「婦人解放」思想との関わりについて、「初期の戯曲『恋の喜劇』(1862)あたりにも見受けられないことはないが、『人形の家』に至って初めて色濃く現れてくる」¹⁰⁾とする。そして、イプセンはその頃、「ノルウェイの婦人運動の先端を行く作家カミラ・コレットの作品やジョン・スチュアート・ミルの書物を夫人と共に読み、それらの書物から大きな影響を与えられたといわれている」¹¹⁾としながらも、『人形の家』執筆の直接的動機を作者の個人的体験に関わるものとみている。

直接の動機となったものは、1878年、彼が再度ローマに赴いた時、そのスカンジナビア協会に対し、協会内の仕事に婦人を採用することと婦人にも発言権を与えるようにという二つの提案をしたところ、その提議が否決されたことであつたらう。彼はその翌年5月から筆を取って、3ヶ月後の8月にアマルフィにおいてこの画期的な作品を完成している。¹²⁾

と述べている。そして、『人形の家』のノーラの取った行動に対しては賛否両論がわき起った」と。矢崎によれば、その後のイプセン受容は以下の様になる。

そこでイプセンは家出をしなかった場合の姿としてアルヴィング夫人の悲劇的な運

命をつぎの作『幽霊』において描いている。これはノラの家出を有利に承認させるための反証的材料であったのだが、この作には猛烈な攻撃が浴びせられた。それに対してまたもやイブセンは『民衆の敵』をもってその攻撃を痛烈に投げ返している。このようにイブセンの戯曲は、その一つ一つが前の作の結論から新たな出発をして更に異なった結論へと到達しているのである。¹³⁾

矢崎はそれゆえ、「イブセンの作品をよりよく理解せんがためには、その全体を有機的関連の下にながめなければならない」という。

この劇の問題点¹⁰⁾

イブセン自身はその晩年に、「女権問題には関わりない、ただ人間を描写してきただけ」という言葉を残している。¹⁴⁾ これはこの劇以降のイブセン劇全体について述べたものと解される。とすれば、イブセンは問題提起をただけで、解決を示さなかったのか。家出するだけでは解決にならない。作者自身、心の通わない夫婦の問題をどう解決したものか、その後一作毎模索することになる。イブセン研究者毛利三彌は、「解答はいつも出なかった。最後作品でも、一度出した解答を最終稿で取り消した」¹⁵⁾ と解している。そして演劇研究者毛利は次のように結論する。

「生きるとは、己の内部の魔物（トルル）と闘うこと / 書くとは、己自身に審判をくだすこと」とイブセンは詠った。作者は問うのみ、答えるのは読者、観客だとも言った。作品内の不安や恐れは、我々に伝染する。われわれもまた、己のトルルと闘い、己に審判をくださなければならない。そういう効果を観客に及ぼすことが演劇の面白さとは、近代以前には考えられなかった。ここにイブセンの革新性があった。¹⁶⁾

北欧公演台本『ふたりのノーラ』

2003年8月に、毛利氏から突然メールがあって、2005年のノルウェイ・日本修好100年記念に、日本からイブセン劇を持ってゆく計画あり、能翻案はその後どうなっているかとの問い合わせを受けた。私は台本製作中であることを告げた。新劇俳優を加えたコラボレーションは出来ないかとの提案に、それは面白い、と思った。すでに『能・クレオパトラ』（新国立劇場、2000. シテ津村禮次郎）¹⁷⁾ で実験済みである。そこで、台本共同制作、共同演出で、2005年のノルウェイ公演に向けて進めることで合意した。渡欧前に日本でも公演しよう。こうしてイブセン能化の私の夢は、ようやく実現の運びとなった。

名取事務所制作、日本芸術文化振興会その他助成、『ふたりのノーラ』（*Double Nora*, シ

テ津村禮次郎、ワキ安田登、大鼓大倉正之助、ほか) 北欧公演は2005年8月25日から9月6日にかけて実現した。スウェーデン・ノルウェイ(2箇所)・イギリスの3カ国公演で、それに先立ち東京は梅若能楽学院で、8月9日・10日と披露した。このヨーロッパ公演は幸い好評を得、¹⁸⁾ 2006年8月のフィンランド・アイスランドを含めての再演に繋がった。能形式がこの劇のエッセンスを引き立たせ観客の感情に激しく訴えた。居グセのシーンは涙を誘った。新劇役者は対照的にリアリズムの演技と知的な会話で補完し(台本全体の英訳を配布し客席もやや明るくした)、全体の理解を容易ならしめた。しかし能をよく知る観客の中には、新劇俳優が能役者と同じ舞台上で演じたり話したりするのに、また、謡いになじまない口語の無理な謡いに、違和感を感じた人たちもいた。観客のなかには日本人もいた。しかし最後に、ノーラは家出をするが、希望も感じられる明るい演出にしたことは、好意的に受け取られたようである。

上演台本の実験性

渡欧前の梅若能楽学院での公演に、上記の違和感を感じた人はさらに多かったと思う。能ではシテが実質、演出を兼ねている。最大限シテの意見を尊重した制作・演出になる。今回は最終的に、口語版で、毛利三彌氏の翻訳そのままの言葉を謡ってみるという大冒険となった。能の構成も敢えてとらず、台詞をカットしてきりつめるだけで、いくつかの場面をほとんどそのままの順序で演じてゆく。結果的には、能風の場面、新劇の場面、両者共演の場面などとなり、能楽師の謡いと新劇俳優のせりふの掛け合いは、初めての大胆な試みで、大変な実験となった。演技の混交はなじむところまで行かなかった。

イブセンの生地シェーエンでの公演

ノルウェイの首都オスロ(Oslo)からバスで南西へ2時間ほど下ったところにシェーエン(Skien)という町がある。イブセンの生地で彼が14歳まで育った町である。そのイブセン劇場(Teater Ibsen)で2夜公演し(公演は大成功だった)、次の公演地である西海岸のベルゲン(Bergen)へ向かうバスの中で、しみじみ思ったことがある。明るい終わり方ともとれる演出でよかった。それにしても、今この生地を後にして、ひしひしと感じる寂しさは一体どこから来るものなのか。バスは岩山の狭間を、左に右に湖水を眺めながら、夏の終わりのやさしい陽射しを一杯にうけて北西に向かって走っている。近代劇の生みの親とも言われるイブセンが、なぜ生地の「イブセン・フェスティヴァル」に町中あげて祝ったり騒いだりしないのか。オスロから森の中を2時間走って急に開けたかなりな町なのに、なぜガイドブックにも全く紹介されていないのか。英語でも、まして日本語でも、パソコンの検索になぜ殆んどかかって来ないのか。彼の暗い人生観、実人生、それを反映

したかの如きイブセン・ミュージアムのわびしさ。市民が必ずしもイブセンを肯定していないかの如き印象。市役所職員の反応。書店の店員の「最後は出てゆくのか？」という質問の意味するもの。「ええ、出て行くんだけど、ただ出てゆくんじゃないよ。見てのお楽しみ」と答えたのだが、この家庭崩壊劇がこの国の人々に与えた心理的影響は、他国人には理解できないほど深いものかもしれない。その作家が自国の代表であるということ。イブセン・ミュージアムの二階の一室に、老婆が後ろ向きに坐っていて、そのさびしいつづやきがテープで流される。子供たちには見せたくない怖い部屋だ。あのミュージアムがこの町を象徴している。あの部屋はなくして欲しい、あるいはもっと明るい部屋に変えて欲しい。知り合いになった市の職員にそうお願いしてみようか。次のベルゲンは明るい港町だった。

『能・ノーラ』台本初稿とイブセン死後百年

さて、以下に、現行上演台本『ふたりのノーラ』に改訂する前の、未発表台本『能・ノーラ』初稿（2005年2月）を掲載する。本来海外公演用台本であり、読むためのものではないが、私の「イブセン私論」の結論である。イブセン後期の作品は「次第に象徴的な技巧を深め・・・晩年の作には、いかにも澄みきった味わいがある」と矢崎は評している。

19)

そういう晩年のイブセンの霊に、この台本を捧げたい。2006年は没後百年で、前年好評を得た『ふたりのノーラ』は、2006年8月に、今度はフィンランド・アイスランドを含め再度北欧公演の旅に発つ。だが、イブセンの霊にはこちらの台本を捧げたい。

また、この拙稿を、学生時代にはイブセンにもビョルンソンにも興味もてず、御指導に報いることができなかつた亡き恩師、矢崎源九郎先生の霊に捧げます。

註

- 1) イブセン作 毛利三彌台本『ノーラ、または人形の家』公演台本、名取事務所 p.13
ほか。イブセンは創作ノートに、『海夫人』執筆の前年1887年に、「海を発見した・・・人類の進化は間違った方向に進んできたのか？」と記している。（毛利三彌訳『イブセン戯曲選集 現代劇全作品』p.402）
- 2) 同上台本 p.54
- 3) 同上 p.54 イブセンはこの後に、次の台詞を挿入している。リンデ「あなたさっき、私と一緒にいたら今とは違った人間になってたって、そう言いたかったんじゃない？・・・今からじゃ駄目？・・・あなたとならやって行ける・・・あなたと一緒にならどんなことでも」。結局彼は、彼女によって救われることになる。端役だが、この劇

の鍵を握る人物で、作者はこのリンデという女性に最も好意的なように思える。

- 4) 同上 p.62
- 5) 同上 p.62 この世に生まれると次第に前世のことが思い出せなくなるという輪廻転生である。
- 6) 同上 p.66
- 7) 同上 pp. 67-68
- 8) Peter Watts, “Introduction”, Henrik Ibsen, *A Doll's House and Other Plays*, trans by Peter Watts, p.18
- 9) 毛利三彌訳『イブセン戯曲選集 現代劇全作品』p.2
- 10) 矢崎源九郎「解説」、イブセン著、矢崎訳『人形の家』p.153
- 11) 同上 p.153
- 12) 同上 p.153
- 13) 同上 pp.153-54
- 14) 上記毛利訳 p.3
- 15) 同上 p.842
- 16) 同上 p.843
- 17) 上田ホームページ URL: <http://atlantic.gssc.nihon-u.ac.jp/~ueda/>
- 18) 同上
- 19) 矢崎源九郎「解説」、イブセン著、矢崎訳『人形の家』p.154
毛利三彌著『イブセンの世紀末 後期作品の研究』p.68

使用文献

イブセン作、毛利三彌台本『ノーラ、または人形の家』名取事務所、2000

イブセン作、矢崎源九郎訳『人形の家』新潮文庫、1953

毛利三彌訳『イブセン戯曲選集 現代劇全作品』東海大学出版会、1997

毛利三彌『イブセンの世紀末 後期作品の研究』白鳳社、1995

Henrik Ibsen, *A Doll's House*, Cambridge University Press, 1995. English translation by Kenneth McLeish, edited by Mary Rafferty.

Henrik Ibsen, *A Doll's House and Other Plays*, Penguin Classics, 1965. English translation by Peter Watts.

“UEDA's Home Page”, URL: <http://atlantic.gssc.nihon-u.ac.jp/~ueda/>